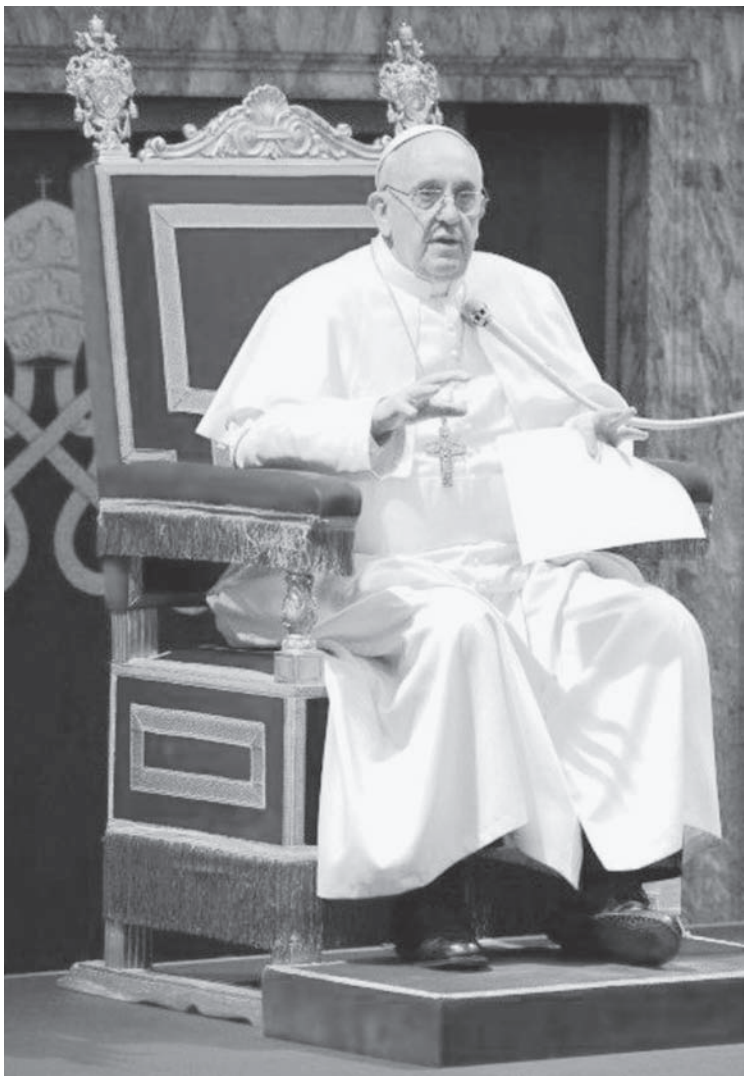
SAPPORO 教区 NEWS
第20号
2013年4月15日
発行：カトリック札幌司教区事務局広報部
〒060-0031 札幌市中央区北1条東6丁目10
Tel. 011-241-2785 ／ホームページ：http://www.csd.or.jp

主のご復活心よりお喜び申し上げます！

第266代目ローマ教皇にベルゴリオ枢機卿が着座 教皇名はフランシスコ

第266代目のローマ教皇に、アルゼンチン出身のホルヘ・マリオ・ベルゴリオ枢機卿が選出された。教皇名はフランシスコ（イタリア語：フランチェスコ）。新教皇を戴き、バチカンに集った信者たちは歓喜に包まれた。



新教皇の選出を告げる白煙がシスティーナ礼拝堂の煙突から上がった。（3月13日午後7時6分＝日本14日午前3時6分）それから約1時間経過した午後8時（日本午前4時）過ぎに、期待で胸をいっぱいにした聖ペトロ広場の群集の前に、新教皇の名を告げる役である、プロトディアコノのジャン・ルイ・トーラン枢機卿が大聖堂の中央バルコニーに現れた。

人々の割れるような拍手に、すぐに緊張と沈黙が続いた。「皆さんに大きな喜びをお伝えします。私たちは新しい教皇をいただきました」

トーラン枢機卿のラテン語の告知に喜びに沸いた会衆は、その新教皇の名を知ろうと、バルコニーを見上げながら一心に耳を傾けた。

そして、いよいよ第266代教皇に選出された枢機卿の名が厳かに告げられた。「ジョルジウム（ホルヘ）・マリウム（マリオ）・ベルゴリオ」。新教皇の名は「フランシスコ」。その瞬間、地響きのような人々の歓声が広がっていった。

十字架を先頭に、枢機卿らと儀式奉仕者たちを伴い、白スータンと短白衣を身につけた新教皇フランシスコがバルコニーに現れた。祝福のしるしをしながら、人々の割れるような拍手と歓声に応えた。

そして、新教皇は次のように第一声を述べた。

「兄弟姉妹の皆さん、こんばんは。皆さんもご存知のように、コンクラーベの義務はローマ司教（教皇）を選ぶことです。わたしの兄弟なる枢機卿たちは、その教皇を世界の果てまで探しに行ったようです。しかし、わたしたちはここにいます。皆さんの歓迎に感謝します。ローマ教区の共同体、ありがとう。」

新教皇は、人々の歓迎に感謝を表し、何よりも先に前教皇ベネディクト16世のために祈りたいと述べ、皆と共に「主の祈り」「天使祝詞」「栄光唱」を唱えた。

続いて新教皇は次のように話した。

「これから司教と民の、愛のうちにすべての教会をまとめるこのローマの教会の歩みを始めましょう。それは兄弟愛と相互信頼の歩

みです。いつもわたしたちのため、互いのために祈りましょう。全世界のために祈りましょう。そこに大きな兄弟愛がありますように。」

「今日からわたしたちが始めるこの教会の歩み、わたしを補佐するのは、ここにおいでのローマ教区教皇代理司教の枢機卿ですが、この歩みがこの大変美しい街の福音に実りをもたらすよう願っています。」

「今から祝福をおくりたく思いますが、その前に皆さんにお願いがあります。司教が民を祝福する前に、主がわたしを祝福してください。それは司教の祝福を願う民の祈りです。沈黙のうちにわたしに対するこの祈りをしてください。」

そして、教皇フランシスコは、「これから、皆さんと全世界、すべての善意の人々に祝福をおくります」と述べ、教皇として最初の「ウルビ・エト・オルビ」（ローマと世界に向けた教皇祝福）をおくった。

【新教皇フランシスコ（本名：ホルヘ・マリオ・ベルゴリオ）の略歴】

1936年12月17日、アルゼンチンのブエノス・アイレスで誕生。

初め化学工学のディプロマを取得したが、後、司祭職への召命に従い、ヴィッラ・デヴォート神学校に入学する。

1958年3月11日、イエズス会修練院に移り、イエズス会に入会。

1963年、チリにて人門学を修め、その後ブエノス・アイレスに戻り、サン・ミゲルの聖ヨゼフ学院で哲学の博士号を取得。

1964年から65年にかけて、サンタ・フェの無原罪学院にて、文学と心理学の教授を務める。

1966年、同じ学科をブエノス・アイレスのサルバトーレ学院で教える。

1967年から70年にかけて、サン・ミゲルの聖ヨゼフ学院神学部で神学を勉強し、神学博士号取得。

1969年12月13日、司祭叙階。

1970年から71年、スペインのアルカラ・デ・エナレスで第三修練を終え、1973年4月22日終生誓願を宣立。

1972年から1973年、サン・ミゲルのヴィッラ・バリアィで修練長、その後、神学部にて教授を務め、管区評議員、イエズス会学院の院長を歴任。

1973年7月31日、イエズス会アルゼンチン管区管区長に選出され、6年間の任期を務めた。

1980年から86年、イエズス会哲学・神学院院長およびサン・ミゲル教区のサン・ホセ小教区の主任司祭となる。

1986年3月、神学博士論文を完成するためドイツに赴く。その後コルドバのイエズス会教会の霊的指導者および聴罪司祭となる。

1992年5月20日、教皇ヨハネ・パウロ2世によりブエノス・アイレス補佐司教に任命される。

1997年6月3日、ブエノス・アイレス協働司教。

1998年2月28日、ブエノス・アイレス大司教クワラッチノ枢機卿没後、同大司教となる。

「修道者のための黙想」（1982年）、「使徒的生活考察」（1986年）「希望についての考察」（1992年）などの著書を著す。

2005年11月から2011年11月まで、アルゼンチン司教協議会会長を務める。

2001年2月21日、教皇ヨハネ・パウロ2世により枢機卿に任命され、名義教会としてローマ市内の聖ロベルト・ベラルミーノ教会を与えられる。

2013年3月13日、教皇ベネディクト16世退位後のコンクラーベで、第266代ローマ教皇に選出され、教皇名フランシスコを名乗る。

新教皇フランシスコの選出を祝って、日本カトリック司教協議会会長池長潤大阪大司教の談話

カトリック信者の皆様

3月13日、アルゼンチン出身のホルヘ・マリオ・ベルゴリオ枢機卿が新しく第266代教皇に選出されました。教皇はフランシスコと名乗られます。

新教皇は、これまでの牧者としての豊かな経験に基き、福音宣教への強い熱意を持って、これからの教会を指導してくださるだろうとわたしたちは期待しております。神がこの新教皇をつねに力づけ、必要なすべての助けを与えてくださるよう祈りたいと思います。

さて、カトリック教会は、第2バチカン公会議（1962年～1965年）開幕から50年を機に、昨年10月より1年間を「信仰年」と定めた前教皇ベネディクト十六世の意向に従い、公会議の精神に生きるように努めています。同公会議は、教会の現代化、世界の苦しむ人々との連帯、他宗教やキリスト教各派への敬意と対話を打ち出しました。また、「自分の懐に罪人を抱いている教会は、聖であると同時につねに清められるべきであり、悔い改めと刷新との努力を絶えず続ける」（教会憲章8条）と宣言して、教会は常に回心する必要があると表明しました。教皇フランシスコ一世と共に、わたしたちはまず教会の刷新のために努力しなければならないと思います。

そして、昨年開かれた第13回世界代表司教会議（シノドス）で発表されたメッセージの中では、「新しい福音宣教」へと教会が歩み続けるために、わたしたちは至るところで福音を告げ知らせ、信仰を活性化する必要があると述べられています（最終メッセージ2参照）。また、福音を宣べ伝えるために「必要なのは、イエスが人々に近づき、人々を招いたやり方を再発見し、現代の状況の中でそれを実践すること」（最終メッセージ4）が求められています。

新教皇とともに、カトリック教会は、現代世界のさ

まざまな問題を解決するために関わっていかなくてはいけないと自覚しています。たとえば、さらに深刻さを増した経済格差の是正。貧しい人、子ども、難民、女性の権利の擁護。受胎から自然死に至るまでのいのちを守ること。各地の戦争や紛争の中で、正義と人権、平和を実現するために献身すること。信教の自由の保証と宗教間の対話。宗教を理由にした暴力の根絶。原発などのエネルギー問題の解決と環境保護への努力。医療を受けられない人々への対応・保健活動。そして、移住者への奉仕などです。カトリック教会は、国際レベルでも、国内レベルでも、すべての国、国連、国際機関、そしてすべての善意の人々との協力のうちに、これらの課題と取り組んでいこうとしています。

わたしたちも新教皇のために祈るとともに、神の国の建設のために力を尽くしていきたいと思います。そして、新教皇のために、聖霊の導きを祈り、教会の母である聖母マリアに取り次ぎを願いましょう。

教皇フランシスコの紋章解説

教皇フランシスコの紋章に描かれたシンボルと、下に記されたモットーについて解説する。

―紋章の盾―

教皇フランシスコは、教皇紋章として、司教叙階の際に作成した紋章を続けて使用される。

紋章全体は空色で、ベネディクト16世の時から使用されている教皇のシンボル「ミトラと緋色の紐で結ばれた金銀の鍵」が表現されている。

紋章内部は、教皇の出身修道会、イエズス会の紋章が描かれている。キリストを象徴する燃える太陽の中に、赤文字でイエスを表す「IHS」が書かれている。Hの上に十字架があり、その下には黒い3本の釘がある。

下部には、図案化された星とナルドの花が描かれている。星は、聖母マリアを象徴し、ナルドの花は、教会の保護者聖ヨゼフを意味する。ご自分の紋章にこのようなシンボルを使用することによって、教皇は聖母マリアと聖ヨゼフへの特別な信心を表されている。

―モットーの意味―

教皇フランシスコの紋章のモットー、〝Miserando atque eligendo〟(憐れみ、そして選ばれた)は、聖ベーダ・ヴェネラビリス司祭の説教の言葉から取られている。聖ベーダは、使徒聖マタイの召命のエピソードを次のように解説している。

「イエスは徴税人（マタイ）を見つめ、『憐れみ、そして選ばれ』、わたしについてきなさいと言った」。

この言葉は、教皇フランシスコの霊的生活において特別な意味合いを持つことになった。1953年の聖マタイの祝日に、17歳だった若いホルヘ・ベルゴリオは、まったく特別な方法で、その人生における神の憐れみの現存を強く体験した。その時、神の憐れみが自分自身の心の奥底に下ってきたことを強く感じたと、後に告白している。そして、神はイエズス会創立者聖イグナチオ・ロヨラにされたように、優しい愛の眼差しをもって、彼を修道生活に召された。

ベルゴリオ神父は、司教に選ばれた時、教会における自分の全面的な奉献の開始をしるすその際に、生涯のモットー、計画として、聖ベーダのあの言葉「憐れみ、そして選ばれた」を採り、教皇紋章の中に使用することを望まれた。

教皇フランシスコの着座式

「ローマ司教の権力とは奉仕」「自然や人間を守り、キリストを生活の中で守る」 カトリック教会の典礼暦で聖ヨゼフの大祝日を祝った19日、教皇フランシスコの教皇職開始を記念するミサがとり行われた。

教皇の着座式を共に祝おうと、バチカンの聖ペトロ広場をはじめその一帯には、およそ20万人の信者が朝早くから続々と訪れた。

前日まで不安定な天候に見舞われたローマは、この日は春らしい暖かな日差しに恵まれ、透き通った空が聖ペトロ大聖堂の白さを際立たせていた。

ミサの前に教皇はジープで広場を一巡され、人々に祝福をおくられた。会衆の歓迎は熱く、教皇は時おり車を止めさせ、人々に親しく挨拶したり、子どもに接吻を与えるなどされていた。教皇フランシスコの故郷アルゼンチンの白と水色の旗はもとより、広い会場にひるがえる色とりどりの国旗が、教会の普遍性を象徴していた。

このミサには130ケ国以上から使節が訪れ、31ケ国の国家元首、6ケ国の君主、3ケ国の皇太子、11ヶ国の首相をはじめ、各国の閣僚や大使などが参列した。日本からは安倍総理大臣の特使として、森元総理大臣が出席した。また、諸キリスト教教会や、ユダヤ教、イスラム教、仏教など諸宗教の代表者らも多く参加した。

教皇フランシスコは、東方カトリック典礼の総大司教らと共に、聖ペトロ大聖堂地下に降り、初代ローマ教皇、使徒聖ペトロの墓前にひざまずき、長い祈りを捧げられた。

この後、2人の助祭が、この礼拝所の壁がんから、「パリウム」と「漁夫の指輪」、そして福音書を取り出した。

再び大聖堂の本廊に上がった教皇は、諸聖人の連祷が厳かに響く中、枢機卿たちを前にし、ご自分は最後尾を牧者のシンボルである司教杖を持って行列し、群衆が待つ広場に進んでいった。

大聖堂前の座についた教皇は、プロトディアコノのトーラン枢機卿からパリウムを、続いて枢機卿団主席ソダノ枢機卿から漁夫の指輪を受け取られた。

パリウムは聖アグネスの日に祝別された子羊の毛を織って作った幅細の帯状のもので、白い生地の上にはキリストの聖痕を表す5つの赤い十字が刺繍されている。祭服の上からY字型に両肩に掛け、十字架の釘を表す3つのピンで留める。これを肩に掛けることは羊を背負った善き羊飼いの姿を象徴する。

一方、漁夫の指輪は、イエスが漁師ペトロに言った

「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」（マタイ4、19）という言葉を思い起こさせるもの。教皇フランシスコが選んだ指輪は、イタリア人彫刻家がかつてパウロ6世のために作った指輪と同じデザインであるが、パウロ6世はこの指輪を使用していない。指輪の表面には鍵を持った聖ペトロ像が描かれている。

おとめマリアの浄配にして普遍の教会の保護者である、聖ヨゼフの大祝日に捧げられたこのミサの説教で、教皇は「保護者・守る人」としての聖ヨゼフの召命を観想。

神に耳を傾け、神の御旨に忠実な聖ヨゼフ、託された人を守り、出来事を読み取り、賢明な判断ができる聖ヨゼフに、神の召し出しに答えるということはどういうことかを学ぶよう、また「キリストをわたしたちの生活の中で守る」というキリスト者の召命を生きるよう、すべての信者を励まされた。

教皇は「守る」という召命は、キリスト者に留まらず、人類全体に関わるものと述べ、美しい自然、自分たちが生活する環境を守り、お年寄り、子どもたち、弱い立場にある人々など、すべての人間を守ることの大切さを強調。

政治・経済・社会の分野で責任的立場にある人々に、命や人や自然を守り、世界の歩みに破壊と死が影を落とすことがないように願われると共に、すべての人に、自分自身の心を守り、人生を汚す憎しみや妬みではなく、優しさや思いやりを持つようにと勧められた。

ペトロの後継者としての任務を始めるにあたり、教皇はイエス・キリストがペトロに与えた権力とは何かと問いながら、イエスがペトロに言った「わたしの羊の世話をしなさい」という招きを示し、「真の権力とは奉仕であることを忘れてはならない」と説かれた。

教皇フランシスコは、説教の終わりに「わたしのために祈ってください」とすべての人々に願われた。

ミサ終了後、教皇は聖ペトロ大聖堂内で、世界各国の代表者に挨拶をおくられ、一人ひとりの手を取りながら、親しく言葉を交わされた。

教皇フランシスコ初めての日曜の集い
「神の慈しみは世界を変える」

教皇フランシスコは、バチカンで17日、選出後初めての日曜正午の集いを持たれた。

同日早朝、教皇はバチカン市国の聖アンナ門内側にある、聖アンナ教会で日曜日のミサを捧げられた。ミサ終了後、教皇は同教会所属の信者たち一人ひとりと言葉を交わされた他、門の外で待っていた市民たちにも挨拶をおくられた。

続いて正午から行われたアンジェラスの祈りには、ローマ市発表でおよそ30万人が参加。聖ペトロ広場はもとよりバチカン一帯に巡礼者たちがあふれ、教皇フランシスコ選出の時と同じ熱気を帯びていた。

教皇は集いの説教で、神の憐れみと赦しについて、次のように話された。

「兄弟姉妹の皆さん、こんにちは。前の水曜日の最初の出会いに続いて、また今日、再び皆さんに挨拶をおおくりできます。今日、日曜日「主の日」に、皆さんとこうしてお会いできることをうれしく思います。今、わたしたちがこの広場でしているように、日曜日に出合ったり、互いに話し合ったりすることは、我々キリスト者にとって素晴らしく、重要なことです。この広場もメディアのおかげで世界的な広場になりました。

四旬節第5主日の今日のミサの福音は、イエスが死刑から救った「姦通の女」のエピソード（ヨハネ8、1－11）が語られています。

イエスの態度は心を打つものです。イエスは蔑みの言葉も、断罪の言葉も言いません。わたしたちが聞くのは、ただ愛の言葉、回心に招く憐れみの言葉だけです。

「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。そしてこれからもう罪を犯さないようにしなさい。」

兄弟姉妹の皆さん、神様の御顔はどこまでも忍耐強い、憐れみ深い父親の顔です。皆さんは、わたしたち一人ひとりに対して神が持っておられる忍耐について考えたことがありますか？あれが、彼の憐れみです。神にはいつも忍耐があります。わたしたちに対し忍耐し、理解し、待ち、心を改めて神の下に戻るならば、わたしたちを赦すのに決して疲れを知らない神です。詩編も「主の憐れみは偉大」と言っています。

最近、一人の枢機卿の、カスパー枢機卿―優秀な神学者です―の「憐れみについて」書かれた本を読む機会がありました。その本はわたしに大変役に立ったのです。とても役立ったのです。でも、別にわたしの枢機卿たちの本を宣伝しているわけではありませんが。そうじゃありませんよ。しかし実際よい本なのです。本当に。カスパー枢機卿は言っています「憐れみという言葉を聴くこと、この言葉はすべてを変える」と。世界を変えるのです。素晴らしいことです。

もう少し憐れみがあれば、世界は前より少し冷たくなくなり、もう少し正義に沿ったものになるでしょう。わたしたちはこの神の憐れみを、とても忍耐強いこの憐れみ深い御父を、もっとよく理解する必要があります。「たとえわたしたちの罪が緋のように赤くても、神の愛はそれを雪のように白くするでしょう」と言う、預言者イザヤを思い起こしましょう。

憐れみとはなんと素晴らしいものでしょう。1992年、司教になったばかりの時、ファティマの聖母のご像がブエノス・アイレスにやって来て、病者たちのために荘厳なミサが捧げられました。そのミサの時、わたしは告解を聞きに行きました。

ミサの終わり頃、わたしは堅信の秘跡を授けに行かなければならなかったので、席を立とうとしました。すると、一人の年老いた、非常に慎ましい80歳を超えたと思われる婦人がやってきました。わたしは彼女を見つめて「ノンナ（おばあちゃん）」―アルゼンチンではお年寄りをこう呼んでいるのですが―「ノンナ、告解したいのですか」と聞きました。彼女は「そうです」と答えました。「でも、あなたには罪がないでしょう」と言いますと、ノンナはこう答えました。「わたしたちは皆罪を持っています」。「けれども、主が罪を赦さなかったら…」ノンナは「主はすべてを赦してく

ださいます」と確信を持って言うのです。「あなたに、どうしてそれがわかるでしょう？」と尋ねると、彼女は「もし、主がすべてをお赦し下さらないなら、この世は存在しないでしょう」と。彼女に尋ねてみたくなりました。「もしかして、あなたはグレゴリアン大学で勉強したのですか」と。なぜなら、その答えは聖霊が与えてくださる神からの上智、神の憐れみについての内的な上智だからです。

この言葉を忘れてはなりません。神はわたしたちを赦すのに決して疲れを知りません、決してです！「では、神父様、何が問題なのですか？」問題は、わたしたちのほうが赦しを願うことに疲れてしまい、わたしたちがそれを望まないことです。神は際限なく赦されても、わたしたちのほうが、時々、赦しを願うことに飽きてしまうのです。わたしたちは決して疲れてはなりません。決して疲れてはだめです。神は常に赦される愛情深い御父です。わたしたち皆のためにあの憐れみの心を持っておいでです。わたしたちも、すべての人に憐れみ深くありましょう。人となられた神の憐れみをその腕に抱かれた聖母に、取次ぎを祈りましょう。」

そして、教皇はアンジェラスの祈り（お告げの祈り）を信者らと共に唱え、祝福をおくられた。

集いの終わりに教皇は、聖ペトロ広場からテベレ川方面まで広がる会衆に、再び親しく語りかけられた。

「すべての巡礼者の皆さんに挨拶をおくります。皆さんの歓迎と祈りに感謝します。皆さんにお願いします、わたしのために祈ってください。わたしの抱擁はローマの信徒の皆さんに、またイタリアと世界の各地から訪れたすべての皆さん、そしてメディアを通してわたしたちと一致している人々に及びます。

わたしはイタリアの保護者、アッシジの聖フランシスコの名を選びました。ご存知のようにわたしの家族はイタリア系ですが、このことはわたしとこの地の精神的絆を強めることになりました。しかし、イエスはわたしたちを一つの新しい家族の一員になるよう招かれました。イエスの教会、この神の家族の中で、福音の道を共に歩んでいくのです。主が皆さんを祝福してくださいますように。聖母が皆さんを守ってくださいますように。

このことを忘れないでください。主は赦すということに疲れを知りません。わたしたちのほうが、赦しを願うことに疲れてしまうのです。

よい日曜日を、そしてよい昼食を！」こうして、教皇フランシスコは最初の日曜の集いを終えられた。

東日本大震災被災者追悼・復興祈願ミサが行われる

3月11日（月）14時30分から北11条教会を会場に教区管理者代理で被災地ボランティア担当である上杉昌弘神父の主司式で約200名の方が参加して行われた。震災の時間に黙とうを捧げ、ミサ後には宮古ボランティアの報告会も開催された。

ミサの説教では上杉神父から、仙台教区のマルチノ平賀徹夫司教からの皆さんの支援に対する感謝の言葉が紹介され、仙台教区では3月10日の主日のミサで一斉に被災者追悼と復興祈願ミサが行われたこと、3月11日には大船渡教会で平賀司教司式で被災者追悼と復興祈願ミサが、同じ式文で行われたことが紹介され、「もっとも弱い人々と共にいる」という神様のさとしに耳を傾けて、被災者に寄り添って心を一つにして祈りましょうと語りかけ、これからも続けて被災者の方々に寄り添うことが大切であると述べられた。

また、日本カトリック司教協議会会長のレオ池長潤大阪大司教のメッセージも紹介された。

「再び3月11日を迎えるにあたって」

東日本大震災から丸2年を迎えようとしています。現在もなお、被災地の方々が平安や希望を取り戻されたとか、復興の目処が立ったとかとは、とてもいえない状態が続いています。そこで、日本のカトリック教会全体に対して、司教協議会会長としてできるかぎりありのままの現状をお伝えし、わたしたちに何ができるかを皆さまとともに考えたいと思います。

被災地の方々にとって、今、一番の悩み、苦しみ、悲しみ、不安の原因は、ひとことで言うなら、復興の予測がまったくたっていないということにあります。安定して過ごせる住居、放射能汚染除去、産業の回復や就業・就職といった、復興に欠かせない被災地の問題の解決を、あまりにも見通せないことが大きな壁になっています。

住居に関しては、当初は避難所生活でしたが、今は仮設住宅での暮らしとなり、これからは災害復興住宅へと移られることになります。ただし、それがいつになるのかの見通しは立っていません。そのため、経済力・体力・気力のあるかたは仮設を出て行き、「弱い」かたたちが取り残されてゆく傾向が現われています。残されるかたがたにとっては、新たな精神的苦痛を負うことになり、将来への不安から、自ら命を絶つことに傾く方が増えることへの懸念もあります。

放射能汚染に苦しむ福島県では、安心して故郷に帰れるのは5年以上先になるといわれていますが、実際にはもっと先になるのではないかと思われます。現在、福島からの避難者は16万人に及ぶとみられています。汚染が除去されないなら、どうして故郷に戻れるでしょうか。さらにこれからも原発が存在する限り、愛する故郷を奪う放射能汚染は繰り返される恐れもあります。人間の知恵は完全ではないのです。

就業・就職に関しては、将来も保証される安定した雇用先が得られないことから、若い人々の流出が増えています。その背景には、沿岸部に多い第一次産業の立て直しが難しいことがあります。なぜ難しいのか、どうすれば立て直せるのかは解決していかなければならない課題として残されています。

カトリック教会は、被災地に暮らすかたの心に寄り添うこと、また地域の交わりを形成する支援に力を注ぐことに努めています。

被災地での支援や全国の修道院での祈りの形で今も続けられているシスターズ・リレー、日本のすべての教会管区が被災地に思いを寄せているしるしであるボランティアベース、教会の交わりを通じて全国から派遣されたスタッフやボランティア。これまでさまざまな形でかかわってこられた皆さまに、心からの感謝と敬意を表します。教会のはたらきが、被災されたかたがたの心をつなぎ、寄り添うお手伝いとなれば有難いことです。

ボランティアベースは教会が地域に寄り添うための、いわば「基地※」です。かつて避難所生活から仮設住宅へ移行する時にあったように、今また、仮設住宅から災害復興住宅への過渡期にも、これまでお互いに知り合い、なじみになった人々がまた離れ離れになることが懸念されています。地域の交わりを形成する支援が必要なのは、心の交流の寸断による新たな苦しみを和らげることが復興のためにとても大切な要素になるからです。この支援に教会のボランティアベースを活用していただくことを切に望んでいます。

寄り添わなければ傷も痛みもわからないでしょう。耳を傾けなければ聞こえない声があるでしょう。人間として謙虚で真摯な姿勢を備えていないと、本当の意味で寄り添うこともコミュニティづくりに貢献することもできないでしょう。お一人おひとりの現実に寄り添わせていただくこと、それは支援の一つの形です。けれどもむしろ、支援にあたる側が与えられるものも多いのです。

これからも、物心両面からの支援を続けながら、心を寄せ続けてくださる全国の皆さま、世界のかたがたとともに祈りましょう。祈りには力があります。祈りは決して忘れないことのしるしです。

……

あわれみ深い神さま、あなたはどんな時にもわたしたちから離れることなく、喜びや悲しみを共にしてくださいます。今回の大震災によって苦しむ人々のために

あなたの助けと励ましを与えてください。

わたしたちもその人たちのために犠牲をささげ、祈り続けます。

そして、一日も早く、安心して暮らせる日が来ますように。

また、この震災で亡くなられたすべての人々が

あなたのもとで安らかに憩うことができますように。

主キリストによって。アーメン。

母であるマリアさま、どうかわたしたちのためにお祈りください。　アーメン。

……

※仙台教区サポートセンターを中心として、次の10のベースなどで支援活動を行っています。（北から）

①宮古ベース
②大槌ベース
③釜石ベース
④被災地障がい者支援センターかまいし
⑤大船渡ベース
⑥米川ベース
⑦石巻ベース
⑧原町ベース
⑨いわきサポートステーション「もみの木」
⑩福島デスク（二本松）

……

ミサ後には、宮古ボランティアの報告会が行われた。

直近に参加した4名から「心の痛手が当然のことだがまだまだ残っている。これからも支援は必要だと改めて感じた。」「愛の絆と自分ではよんでいるが、本当に必要だと思う。」「話を聴き寄り添うことの大切さを改めて実感した。」などの状況や感想が述べられた。

最後になりますが、「オールジャパンの支援関係者の皆さま！」と題し、支援の担当者宛てに送られた仙台教区事務局長の小松神父様からのメッセージをご紹介します。

「毎日の支援活動本当にお疲れさまです。さて、昨日は3．11から丸2年が過ぎました。2周年とか、3回忌などの表現は何か違和感がありますので、敢えて丸2年との表現をしますが、丸2年は長いか短いかはそれぞれの感じ方です。皆さまはどうでしょうか？

丸2年は732日だそうです。この間、私たちはそれぞれの場で粛々と被災した方々と向き合い、被災した方々と同じ時間を共有する営みを続けて参りました。向き合い、共有し、受け容れる営みは、正しく神さまを体現する営みであったと感じています。いみじくも引退なさったベネディクト16世は「今回の震災の意味を解らない」とお話し下さいました。しかし、解らないけど、「神さまはあなたがたと共に居て下さいます。」と語って下さったのです。わたしたちの2年間の営みは「神さまが共に居て下さること」を表現した活動ではなかったと考えています。昨年も3．11の場でこんな表現をしたことを覚えております。

わたしたちカトリック教会の歩みはこれからが正念場であり、本番です。来年の3．11に震災から1000日を迎えてもわたしたちの歩みが私たちの歩みでありますように！お祈りします。」

新富町教会で最後の感謝ミサが行われる

信徒の方から感謝ミサの様子と新富町教会の思い出をお伺いしました。

感謝ミサ　さようなら新富町教会

1965年（昭和40年）の創立以来48年間の歴史を刻んできた新富町教会が解体されることになり、3月10日（日）に思い出の聖堂において感謝のミサが行われました。

振り返ると、メリノール会によって当時の旭町教会に次ぐ教会として苫小牧市の西地区に創立され、100名ほどの信者が旭町教会から移籍して「西町教会」としてスタートしたの

でした。

当時、司祭館はありましたが独立した聖堂はなく、日曜日には聖母幼稚園の教室を仮聖堂として使っていました。それから7年後の1972年（昭和48年）に待望の聖堂ができ、富澤司教様をお迎えして盛大な献堂式が行われたのです。聖堂建設資金準備のために始められたバザーは形を変えて今も続いています。1990年（平成2年）には創立25周年を祝い、その時に教会玄関前に建てられた「慈しみの聖母」像が園児を見守り続けてきました。

2006年には表町教会（旧：旭町教会）と統合し、カトリック苫小牧教会としてスタートするに至り、ついに新富町教会の解体が具体的になったのです。3月10日の感謝ミサには懐かしい多くの方々が参加されました。ライヤ神父様の司式で、思い出の古いオルガンに合わせての聖歌が聖堂いっぱいに響き、雪の降る寒い日でしたが心はあたたかさに満たされました。この教会で洗礼を受けた方、結婚式を挙げた方、また親しい方をこの聖堂から見送った日のことなど、集まった一人ひとりの胸に思い出が甦ったことでしょう。

ミサ後のパーティーでは、テーブルを囲んであちらこちらで賑やかな輪ができ48年間の思い出話は尽きることがありませんでした。

この教会跡地がどのようになるかの具体的なプランはこれからですが、建物は消えても一人ひとりの胸に刻まれた思い出は消えることはありません。ライヤ神父様が「一つの扉が閉じられても、新たな扉が準備され開かれていく」と話されたとおり、この日私たちは寂しさだけではなく新たな出発点に立ったような気持ちにもなったのです。

初代主任司祭のメイナード神父様をはじめ、ラッキー神父様、佐々木神父様、ギング神父様ありがとうございました。そしてライヤ神父様、これからもどうぞよろしくお導きください。

神学生関係

佐藤謙一神学生が朗読奉仕者に選任

3月20日（水・春分の日）10時30分から北1条教会（司教座聖堂）で、教区管理者のタルチシオ菊地功司教の司式で、司祭15名、修道者・信徒150名余りが参列し執り行われた。

菊地司教は説教の中で、選任された朗読奉仕者は、司祭になるための一つの段階であるが、典礼の朗読奉仕としての役目、教理を教え準備を手伝うカテキスタとしての役目、未信者の方々にキリストの福音を宣べ伝えるという役目の3つの役目があり、それを自覚し、自分だけではなく、他の人の成長を共に求めていく事が大切であり、率先して先頭にたって福音を証ししていくことが大切であると諭した。そして、4月から3名となる札幌教区神学生のために、そして、これからも引き続き召命があるように、祈ってくださいと結ばれた。

今後は、来年に祭壇奉仕者に選任され、再来年は助祭に叙階され2016年には晴れて司祭に叙階される運びとなります。

神学院入学にあたって

ボナヴェントゥラ　蓑島克哉（帯広教会出身）

皆さん、こんにちは。4月1日に日本カトリック神学院へ入学する蓑島克哉です。蓑という字は、蓑虫の『ミノ』で、『クサカンムリ』に衰退の『スイ』と書きます。田村神父存命中に、この『蓑』という字を大変褒めていただきまして、それからというもの、初対面の方にはこの説明をさせていただいております。子供たちには、ミノモ〇タの『蓑』だよ！といってます。以後、お見知りおきください。

わたしは帯広教会で、主イエスを信じます！と宣言しましたが（田村神父は8番目、私は1217番目になります）、この田村神父のある教えを大切にしています。それは、亀井勝一郎さんの『人生邂逅し開眼し瞑目す』という寸言から、「人生は、自然や人との出会い、そういう様々な出会いを通して心の眼が開かれていく」、「絶対に忘れるなよ」と教えてくださいました。人や社会に無関心であってはならない。わたし自身、友に寄り添いながら励ましたい、隣人として神のことばを語ることができたらいいなと思います。

仕事を辞めて司祭になろうと思った一番の要因は、主任司祭ナルチゾ神父の姿です。わたし自身、神父様からたくさんの暖かい陽差しを浴びて「いつもともにいる神」を知りました。神父様は、「神様から自分のところに送られてきた子羊は、どんなことがあっても見捨てたくない。それが私の使命です」おっしゃられるのですが、その姿のなかに牧者キリストを感じ、心が燃えました。神学院合格後は、北二十六条教会主任司祭の場崎神父のもとで半年間の養成を受けました。神父様はその著書「イエスのたとえ話」の中で〝ぶどう園の労働者のたとえ（マタイ20章1～16節）〟を解説しているのですが、朝早くから働いていた人たちの不平の声について、お金のために働くのであれば当然のことだが、ここでの1デナリオンは、「永遠のいのち」なので、雇われて仕えること自体がボロ儲け、神の恩恵だというのです。キリスト者は全員、ボロ儲け、教会そして社会の中で、それぞれの役割を、一人きりではなく、みんなで一緒に果たしていく恵みをいただいているのだとおっしゃられます。いつも神父様は「人との交わりのなかに、神がおられるのだ」とおっしゃられますが、寄り添う司祭になりたいと思います。

これからしばらくの間、皆さんと離れなければなりません。それがとても寂し

いのですが、わたしたちのうえに神の慈しみがあるように祈ります。聖ボナヴェントゥラの「すべてにおいて基準となるのは、主イエスであり十字架である」という言葉と、聖ヴィアンネの「わたしのやり方を教えましょう。罪人にわずかな償いを与え、残りはわたしが彼らの代わりに行うのです」という言葉のなかに十字架の主を見ながら、神学生生活を始めたいと思います。どうぞ皆様、この小さな僕のために聖母マリアの執り成しをお祈りください。いってきます。

＝３名の神学生＝

今年度（２００３年４月）から、札幌教区の神学生は、哲学科２名（東京キャンパス）・神学科１名（福岡キャンパス）の３名となります。

これからも、皆様のお祈りと、ご支援を宜しくお願いします。

青少年関係

高校生フィリピンエクスポージャー

天国のような美しい村で、２０１３年１月の冬休みに開催。

高校生フィリピンエクスポージャーを引率した青少年委員会の鳥居明子さんのレポートで、その様子を垣間見てください。

「天国のような美しい村で」

１月２日～11日、冬休みを利用し９人の高校生たちとフィリピン、ミンダナオ島キダパワン教区の「イースタービレッジ」を訪ねました。イースタービレッジは十年前に祐川神父が開所した児童養護施設です。

ほとんどの高校生は海外旅行も、十日間家族と離れることも初体験でした。全く知らない言葉を話す異国の青年や子供たちと友だちになれるのか、不慣れな環境で困ることはないだろうかなどと、その日が近づくにつれ、未知の世界への不安と好奇心のうちにフィリピンに向いました。

＝最後の日にみんな一緒に記念撮影＝

私たちは飛行機を乗り継ぎ、迎えの車に揺られ、沿道にココナッツやバナナの木を眺めながら丸一日かけて、３日の夕方イースタービレッジに到着しました。

私にとっては７年前青年たちとここを訪ねて以来２度目の訪問でしたが、そのときはまだ少年だったゴゴやダンテが、頼りがいのあるたくましいな青年になり、かいがいしく高校生たちの荷物をゲストハウスに運び入れてくれました。彼らは他の仲間とともに滞在中ずっと高校生たちに寄り添い、敷地内のココナッツの木に登り実を採ってくれたり、バナナを蒸して潰しココナッツパウダーと砂糖を混ぜて美味しいおやつを用意してくれたり、鶏肉の解体を教えてくれたり、またダンスやゲームやスポーツを通して、魅力的なエンターティナーぶりを発揮し、フィリピンでの生活を満喫させてくれました。

３ヘクタールに拡大したイースタービレッジの広い敷地内には、子供たちが暮らし、食堂のある本館の他に、事務所を兼ね備えた「聖心ホール」、「チャペル」、聖心の布教姉妹会の「修道院」、「幼稚園」、たいていの物は売っている「黄色いお店」、「職員住宅」、研修用に建てられた「ゲストハウス」、川を隔て崖を登ったところにある一軒家で青年たちが自活する「ホープホーム」、さらに鶏やヤギやウサギなどの家畜小屋がココナッツやバナナ、パパイヤなど南国の木々や花々の間に点在し、そこはまさに天国のような美しい村の姿をしていました。

日本語を交えたイースタービレッジの子供たちの美しい歌声で歓迎を受けた高校生たちは、その夜の分かち合いで「温かい人々に迎え入れられた」とホッとした表情で感想を述べていました。こうして高校生エクスポージャーは始まりました。

高校生のエクスポージャーの目的は、「異文化に触れ、それを好きになること」です。イースタービレッジの子供たちの抱えている背景がそうであるように、フィリピンをはじめ世界には、高校生たちがまだ知らない厳しい現状がたくさんあります。そうした現実を学ぶこともちろん大切ですが、その前にまずその国の文化、そこに生きる人たちと接し、好きになって欲しい。そしてこれからも彼らの友だちがいるフィリピンに関心を持ち続けて欲しいと願って、青少年委員会は今回の計画を立てました。そのネライ通り、彼らはフィリピンで出会った友だちを大好きになり、帰国のころには、帰りたくない、もっともっとフィリピンのことを知りたいと口々に言い、涙を流すほどでした。

どうぞ高校生たちとイースタービレッジの青年たちの感想をお読みになってください。彼らのフィリピンでのイキイキした日々の様子が伝わってきます。また報告書は４月中に完成させ、各小教区へ配布する予定です。

今回引率の任を快く引き受けて下さった勝谷神父、引率と受け入れ双方の立場でイースタービレッジとの調整など心を砕いてくださった祐川神父、イースタービレッジのスタッフの皆さん、聖心の布教姉妹会のシスターたち、司教館で私たちを歓迎してくださったキダパワン教区のロムロ・デラクルス司教、ご多忙の中私たちのクルージングのお弁当を早朝から準備してくださったダバオ在住のシンガーソングライター本田修二さんとメレスさん、そして素晴らしい体験の機会を与えて下さった札幌教区の皆さまに心から感謝いたします。

参加した高校生の感想を紹介します。

「フィリピンエクスポージャーを終えて」

藤女子高校２年　櫻田　明希

「フィリピン行かない？」という桑原さんの一言から、私のエクスポージャーは始まりました。フィ

リピンに行くことができるというのが私の中でとても大きく、最初はただただ楽しみという思いだけでした。11月に参加者でイースタービレッジの映像を見た時も、1月2日の朝空港に集合した時も、なかなか実感がわかず、イースタービレッジに到着した日でさえ、これから自分はどのようなことを経験するのか考えつかず、ただただ豚の丸焼きに驚いていました。

最初はみんなとてもぎこちなくて、子供たちと仲良くなれるか不安でした。私には現地のビサイヤ語がわからなかったからです。しかし学校へ通う子供たちと私の共通点がひとつありました。英語です。英語でコミュニケーションをとれるということに気がついた私は、積極的に話しかけることができるようになり、女の子たちの部屋に泊まらせてもらった時にはさまざまなジャンルの話ができて、本当に嬉しかったです。子供たちだけに限らず、職員の方々とも会話ができたことも強く印象に残っています。話をする相手とつながりあえた時の喜びは大きなものでした。

あっという間にイースタービレッジでの時間は過ぎ、気づけばお別れの時間。何よりも私の心を打ったのは、子供たちの笑顔でした。キラキラしたあの笑顔に、たくさんの元気をもらいました。イースタービレッジは、本当にあたたかいところでした。あの場所にいくと、誰もが笑顔になると思います。

洋服を着たまま川に入って遊んだり、市場で跳ね回る魚を目撃したり、など、初めての経験がたくさんあったこのエクスポージャーに参加できたことは、私の中で冬休みいちばんの思い出となりました。このような素晴らしい機会を得ることができたのは、私たちの周りでエクスポージャーのために動いてくださったたくさんの方々の支えがあったからだと思います。心から感謝しています。そしていつか、もう一度、イースタービレッジを訪れたいです。

「イースタービレッジの人々へ」

大麻教会　高校1年　佐藤みきと

飛行機というのは便利です。短縮された時間と距離。ドアを開いたらそこにいたようだった。だからなのでしょうか、着いてしばらくそこにいる実感がなかった。物に触ると触れる。それが不思議なくらいでした。額縁の外に追いやられた自分。宙に浮いている印象を受けました。

＝みんなと楽しい運動会＝

そして一夜が過ぎ、マニラからダバオへ。そこからまた自動車にゆられウトウトしているとあっという間にイースタービレッジに着いていました。着いたのは夜です。虫が周りに飛ぶ電球に照らされながら、傘状のテントのしたでパーティが開かれました。全く話が弾みません。その時は少し不安でした。

でもスポーツで体を動かしたり、踊ったりしたときからでしょうか。だんだんみんなとの距離が縮まったように思います。英語は使える方ではありません。でも言葉のコミュニケーションを取ることができなくても、共に体を動かして、笑い合う。それだけで、私は楽しめました。何かの本で読んだことがあります。「コミュニケーションにおいて一番大切なのは言葉ではない」その真意が分かったような気がします。文化や考え方が違えど、私が行った土地には人間がいた。それが大事なのだと思います。

帰りにダバオでギターリスト本田修二さんと一緒にみんなで食事をしました。本田さんはEVにも馴染みがあるのでわかると思います。その本田さんがフィリピンに住む経緯を教えてくれたのですが、その経緯の一つがとても印象に残っています。

「フィリピンに訪れた時、そこにいた人たちに大変良くしてもらった。そこがフィリピンだから、というより、そこにいる人に惹かれた」

簡潔に言うとこんな感じだったと思います。その話をきいたとき、納得しました。私が求めていた表現にぴったり合うのです。自分はフィリピンという土地そのものに惹かれたのではなく、EVのみんなに惹かれたのでしょう。

振り返ってみると、私はフィリピンで何か特別なことをしたわけではないのです。ゆっくりと過ぎる時間の中、昼は出かけたり、川で遊んだり、のんびりする。そして夜はダンスで盛り上がったり、ゴゴ、ダンテ、サミー、マークと夜更かしする。その時間はゆっくりな筈が振り返ってみるとあっと言う間でした。

最後の夜、みんなで踊ったり、ゲームをしたり、とにかく盛り上がった。あの時間が惜しくて惜しくてたまりませんでした。また、あの飛行機に乗って帰るのでしょう。赤ちゃんならば泣きわめいて拒否していたところでしょう。

そして迎えた別れの朝。私は少し早めに起きて、身の回りを片付けて、少しだけ掃除をして、上へ行きました。朝食の準備をして、制服を着て鞄とキッチンを行き来する女子達をみていました。

その時、ビビから一枚の絵をもらいました。正直、英語が聞き取れず、何を言っているのかわからなかったのですが、「クラスメート」の単語だけ聞き取れたので状況が分かりました。前に、パソコンでフェイスブックの写真（自分が描いた絵）をみせて、その経緯あって、絵をプレゼントしてくれたのでしょう。

なんだか得した気分になりました。

そしてイースタービレッジを離れ、海でサンゴ礁を見て、ショッピングをして、帰りました。ゴゴ、ダンテ、サミーとの別れは飛行場です。夜、ダンテは別れ惜しんでいました。いつも陽気なダンテが別れ惜しんでいる姿は意外でした。そして、なんだかそれを見て私は嬉しく感じた。

帰国後、またもや、あっという間に日本に着いたので違和感が自分を支配しました。あの陽気なオチョオチョの歌やガングマンスタイル、ビビがよく歌っていた「コールミーメイビー」が頭に流れました。自然と体がリズムに合わせて動きます。それと同時にだんだん自分が日本にいるという事実に実感が湧いてきて、学校も始まって、いつもの私の日常に戻りました。

また、フィリピンに行きたい。いや、イースタービレッジに行きたいと思って

います。あの日から日が経つにつれ、その思いは増すばかりです。みんなといた記憶がだんだん薄れて「思い出」となっていくのが辛い。

また、会えることを願っています。

「フィリピン体験談」

北広島教会　高校1年　駒井　僚久

この旅行で初めて体験したことがたくさんあった。

はじめての海外。出発前、僕は不安を感じていた。

その理由は二つ。

一つは日本で放送されるフィリピンのニュースはどれも大事件ばかりで僕はフィリピンで死んでしまうのではないかと思った。

二つめは、英語の成績が良くない僕がイースタービレッジの人とコミュニケーションがとれるのか。…心配だった。

出発前に英語の勉強をしてみると熱が出てしまい、最悪だと思った。

そんなこんなでむかえた1月2日。昼一時に出発。飛行機の中でCAに機内食の質問をされ、とまどっていると祐川神父が助けてくれとても助かったと同時に祐川神父様がかっこいいなと思った。僕も英語力を身につけたいと本気で思った。

一日かけ、ようやくフィリピンに到着。最初に足を踏み入れたときに感じたのは、札幌より蒸し暑く、においが全然違うこと。またホテルへ行く途中の車窓からは日本では信じられない光景。我々の車が走っているにもかかわらず、道の真ん中を普通に歩いている人がいるではないか！驚いた。

イースタービレッジに着き、夜、ウェルカムパーティーで僕らはバラバラに座らないといけなくなり、僕はやっぱり少し不安でシスター達のテーブルで食べた。夕食のメニューを見ると、豚の丸焼きがあってビックリした。

朝になって外の木にバナナがなっているのを見た。自然のバナナを近くで見られてフィリピンに来たんだな、という実感が出た。

昼になって行くにつれ、気温がジワジワあがりそこで初めてフィリピンの暑さを知った。

昼食で生まれて初めてマグロの卵を食べてみると、とてもおいしく好きになった。

ダンテ達の家に行ったとき、驚いたことが二つあった。

一つはヤシの実をとるときのこと。僕は木を揺さぶったり切ったりするのではないかと思っていた。すると枝などもないヤシの木を命綱なしで登っていた。取ってきたヤシの実を初めて持ってみると、想像よりも重く飲んでも食べても不思議な味がした。

もう一つはイースタービレッジで飼っている鶏を捕まえ、殺す体験をしたこと。捕まった鶏は、死んだように動かなくなり切られて死ぬとき、意外にも鳴かなかった。

最終日になると、初日がまるで嘘のようで日本に帰りたくないと思った。

そしてここで出会ったこと、仲良くなった人たちを一生忘れないことを誓って日本に戻りました。

日本はやっぱり寒くて最悪だったが、お風呂に入れてホッとした。

帰国から2、3日後、僕はフィリピンの友人と通信したい！と両親を説得して携帯の機種変をした。そしてフェイスブック環境を持った。今でも向こうの人とメールして、近況を知らせたりしている。英語の勉強にもなるのでとてもうれしい～。

僕は、この旅を終えて将来の目標が少し変わった。その目標は叶わないかもしれないし、恥ずかしいのでここには書かない。やっぱり英語の勉強がもっと必要だ。

またイースタービレッジに行ってみんなに会いたい。

＝ココナッツを割ってくれました＝

続いてイースタービレッジからの便りを紹介します。

イースタービレッジからの便り(1)

Dante　ダンテ

エクスポージャーの若者が来ると聞いたときは、早く会ってみたいと興奮状態でした。しかし、いざ到着すると、その興奮はなくなり、恥ずかしさに変わりました。彼らが美男美女だったから恥ずかしかったのではなく、彼らの「くすぐり所」が分からず、気恥ずかしい気持ちになりました。

最初の日は恥ずかしさのために話もできませんでした。準備されたプログラムや活動を通じて、自分なりの歓迎を示したつもりです。

彼らの注目を集め始めた時、ようやく安心し、嬉しく思いました。最初に親しくなったのは男子です。リク、リョータ、ジュン、ミキト、ナオヤです。バスケやバレー、遊びを通じて一緒に楽しみました。男子のおかげで次に女子とも仲良くなりました。忘れられない思い出がたくさんになりました。一緒に料理したこと、夜遅くまで語り合ったこと、川で水浴びし、水の掛け合いっこ、食後の皿洗いも一緒にしました。庭で語り合ったり、くすぐりあったり、アッコ湖で遊んだり、本当にすべてが楽しかった。

しかし、1月8日、送別のパーティーが来てしまった。まだ帰ってもらいたくない気持ちのまま、司会を引き受けてしまい、戸惑いました。名残り惜しさからか、みんな泣いていました。僕も泣きそうな気持ちになりましたが、パーティーは湿っぽいものではなく、楽しいものだと自分に言い聞かせ、なんとか涙をこらえました。最後の晩は、思いっきりの大サービスのパフォーマンスをしました。また、ダバオに一緒に行けることも知っていたので、涙を抑えて、この夜は大いに楽しもうと思ったのです。みんなは僕らが一緒にダバオにいくことを知っていたかどうかは分かりませんでした。

ダバオでの体験

ダバオでは人生最高の幸せと最高の悲しみを味わいました。島に渡ったり、シュノーケリングを楽しんだり、本当に楽しかった。シュノーケルは初めての体験でした。また、ショッピングモールに一緒に行き、彼らの反応がとても面白かった。彼らが言うには「とても安い」でも、僕にとっては「恐ろしく高い」でした。ケーキやシェークなどおごってもらいました。グヤバノシェークのミステリアスな味もありがとう。それから、「食べるだけ食べろ」じゃなく、「食べ放題」の店。ナオヤが僕の顔を見るたびに笑い転げて、最後は涙を流して笑っているのを見て、本当に楽しかった。

みんなを笑わすことができて本当に嬉しかった。どれも良い経験です。

1月10日、ダバオでの最後の夜、また一緒に楽しもうと思ったけれど、ついに泣いてしまいました。それは彼らが帰ってしまうということよりも、この幸せが途切れてしまうという悲しみのためです。もう長い間会えないのかと思うととても悲しくなったのです。でも、みんなは僕の人生の大事な一部になりました。だから、みんなに感謝し、僕のことを気にかけてくれたことにもお礼を言いたいです。みんなの姿は僕の頭の中に記憶され、決してなくなることはないでしょう。リク、サギン、ジュン、ミキト、ナオヤ、カノン、アキ、モエ、コムギ、本当にどうもありがとう。みんなが僕の気持ちを綴ったこの文章を読んでくれることを願っています。みんなのことを思うと涙が止まりません。自分の感情を抑えることができません。

＝離れる前日のパーティーで＝

ありがとう、友よ、最高の友達。

イースタービレッジからの便り(2)
Jovelyn　ジョビリン

最初にフェイスタイムでエクスポージャーで来る人たちを見たとき、本当に恥ずかしかった。もともと人と話をするのは苦手だし、それにハイテクな方法で会うんだから、慣れてないし、恥ずかしいだけだった。

みんながイースタービレッジに到着してから、大騒ぎになり、毎日が本当に楽しかった。いつもプログラムや活動があって、参加者が慣れない新しいことにチャレンジする姿が印象的でした。ゴゴ兄やダンテ兄、サミーやマークは本当によくみんなの中に混じって入って歓迎していたわ。

私はアッコ湖に行くのは初めてで、みんなやホームの人たちと本当にエンジョイしました。水遊びをしたり、おしゃべりをしたり、歌ったり…イースタービレッジ滞在最後の夜、みんなが帰ってしまうのかと思うと寂しくなりました。参加者が一人ひとりメッセージをくれ、泣き始め、帰国したくないと聞いたとき、本当にそうなればいいのにと思っていました。短い期間でしたが、一緒に過ごすことができて嬉しかった。今は寂しい思いです。女子とは同じ部屋で寝ることもできて、良い思い出です。みんなの人懐っこさを思い出すたび、寂しく感じます。また、来年みんなと会いたいです。体には気を付けてね。

イースタービレッジからの便り(3)
Bibi　ビビ（エディリン）

最初にエクスポージャーにくる人達がいるって聞いたとき、半分嬉しく、半分悲しかった。なぜなら、他の国からまた新しい友達が来て、何日か一緒に滞在してくれる。それは嬉しいけど、私たちもまだ英語がちゃんと話せないから解り合えないんじゃないかって思ったら半分悲しい思いがしたのです。

みんなが到着した時、私だけじゃなく、ベルナもエリサもジョビリンも恥ずかしがっていたわ。だって、私たちはフィリピン人だし、彼らは日本人、その違いのせいで、理解し合うのは難しいだろうって考えていたから。私たちも英語がそんなに得意じゃないし、彼らも同じようにあまり得意じゃないとすれば、双方とも会話が難しくなって、結局はあまり会話をしないで終わってしまうわってね。でも、ソーシャルワーカーのミミ姉に一緒にどんな活動やプログラムにも参加し、協力しあいなさいと言われ、やってみることにしました。そうしたら、だんだんと親しい友達になり、特に女子とはお互いに冗談を言い合えるくらいにまでなりました。

毎日が違っていました。初日は一緒に遊び、別の日にはスポーツやゲームなどでグループで張りあったり、アッコ湖に行ったりとかね。私たちは少しずつ親しい友達になっていきました。　お互いにコミュニケーションの取り方を学び、そこで気づいたのは、私たちの間にある違いは重要じゃないってこと。もちろん、新しい環境に適応するのは難しいっていうのは知っているわ。でも、日本から来たみんなはごく自然に新しい環境に適応していたのを見て、本当に驚いたわ。まさか、このフィリピンの生活環境にあんなにも簡単に適応できるなんて知らなかったわ。

アッコ湖に行ったときは本当に楽しく、笑い、おしゃべり、ギターで歌を歌って素晴らしい一日でした。いつかまた一緒に行きたいね。また、一緒にエンジョイできることを願っています。

みんなが日本へ帰国する二日前に「送別」という言葉を聞いたとき、突然寂しい想いが胸をかすめました。お互いのことを知り合うのに六日間じゃあまりにも短かすぎるわ。もっと一緒に遊んだり、ビサヤ語を教えたり、彼らのコミュニケーションの仕方をもっと知りたかった。

二日後には帰国してしまい、もう会えないという現実の前に彼らを「送別」するしかなかったの。彼らからは本当に多くのことを学ばせてもらいました。

私は彼らの生活様式や友達との付き合い方などを少しだけど学ばせてもらいました。私たちとコミュニケーションを取るために一生懸命に英語を話してくれる本当に素敵な人たちでした。ユーモアたっぷりで本当に感謝しています。みんなのことは決して忘れません。訪ねてきてくれて本当にありがとう。次回はもっと長い滞在をお願いしますね。

勝谷神父さんが言っていたように、いつか、私たちが日本にいるみんなの元を訪ねてみたいです。まだまだ言いたいことはたくさんあるのだけれど、このペーパーじゃ足りないみたい。また、会いましょう。

伊万里のトラピスチヌ「修道院体験プログラム2013」のご案内

主の平和

キリストの教えは、修道院の中に伝統として恵みのうちに生きられています。

それは聖ベネディイクトの「祈り働け」のモットーに要約されます。伊万里トラピスチヌは自然界の中で営まれる祈りの生活をわずかにオープンにすることを企画しました。物質と情報の文明から離れてする修道体験はあなたに新しい視野を開き、生きる勇気を与えてくれるはずです。なお、修道院体験は、修道院入会者を募るプログラムではありません。

■募集要項■

▽応募対象者：心身ともに健康で、高校卒業程度以上の学力と常識、良識を備えた方で、共同生活を営むことができるカトリックの洗礼を受けた独身の20歳から35歳までの女性の方。

▽体験場所：伊万里の聖母修道院　佐賀県伊万里市二里町大里甲1―41

▽プログラムの申込締切：2013年4月20日（土）

▽選考：伊万里の聖母修道院にて面接を行います。

▽プログラム期間：2013年5月1日（水）～7月31日（水）（3ヶ月間のプログラムを4回続けて参加すると、1年間の典礼を通して修道体験が可能です。）

▽費用：宿泊、食事、プログラム参加のための費用は、当院で負担します。その為、参加者の数は数名に限らせて頂きます。修道院までの旅費は、面接、プログラム参加とも自己負担になります。

▽申し込み方法：ホームページのニュースから申し込み用フォームに必要事項を入力ください。http://www.imari-trapistines.org/（スマートフォンに対応しています。）

▽お問い合わせ：Deogratias@imari-trapistines.orgで受け付けております。なお、電話での対応は行っておりません。

■訃　報■

神様のみもとでの安息をお祈り申し上げます。

◆殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会

▽Sr.M・インノチェンス　森本　静子

故人は、初誓願後の34年間、札幌の藤学園大学事務と法人事務局で会計の仕事を務め、2009年からは修道会管区会計を務めて、忠実に忍耐強く、その務めを愛し、高齢になっても会計の仕事を務めました。50年修道生活を送り、本人が希望していた通り、3月30日に全く突然に、札幌マリア院で神様のもとに召されました。享年84歳

【略歴】

1928年9月6日　札幌市に生まれる
1951年8月15日　受洗
1962年6月29日　入会
1965年1月12日　初誓願
1971年8月12日　終生誓願
2013年3月30日　帰天

▽Sr.M・イルドヴィカ　田村　恵美

故人は、初誓願後は、函館、倶知安、網走、留萌、大麻、旭川などの幼稚園で奉仕。幼稚園退職後は、青森聖母園マリア院、北見マリア院などの院長を務めた。2002年からは花川マリア院で過ごす。65年の修道生活を送り、4月3日に花川マリア院で神様のもとに召されました。享年92歳

【略歴】

1921年3月9日　室蘭市に生まれる
1921年3月20日　受洗
1948年10月2日　入会
1951年8月13日　初誓願
1956年9月15日　終生誓願
2000年11月11日　誓願金祝
2010年11月23日　ダイヤモンド祝
2013年4月3日　帰天

教区の風

＝このコーナーは皆様からの思いやお考え等を掲載するコーナーです＝

カトリック新聞の昨年12月の「みんな燦燦（さんさん）」の記事で、吉川康夫さん（61歳、NPO法人「発達障害児療育センターしらゆり」センター長／兵庫・住吉教会）の書かれた記事の中に、「一般的なADHD（注意欠陥多動性障がい）の人は、興味のないものには見向きもしませんが、一度気に入ると過集中が働きます。また、刺激があるものに反応してしまうので、騒音や気が散るものがあると疲れ果ててしまいます。〝物忘れ〟が多いことも特徴の一つです。坂本龍馬やエジソンもADHDだと言われていますが、ペトロやパウロも私の考えからすれば、ADHDに見えてしまいます。ADHDの人が成功するためには、物忘れ対策など、一つ一つ課題を解決することのほかに、①よき理解者と②よき協力者がいることが大事です。発達障がいのある人は、無理して社会に合わせようと頑張っていますが、努力しても、できない人がいます。例えば高機能自閉症の人に、「もう少しゆっくりしゃべってください」と言っても、説明が抽象的すぎて理解してもらえません。「今、あなたが話している速度を100とするなら、80くらいに落としてくれますか?」と言えば、理解します。つまり具体的に説明することが、高機能自閉症の人にとっての「バリアフリー」。発達障がいの人にもバリアフリーが必要なのです。

障がいの有無にかかわらず、それぞれ得手不得手があります。障がい者は、社会を変えていく特別な使命を持って生まれてきた人たちです。私に発達障がいがあったので、発達障がいの子どもの気持ちがよく分かります。だから、子どもたちの言葉にならない思いを代弁するのが、神様から与えられた私の使命、天職だと感じています。」と書かれていました。

何が個性で、何が障がいなのでしょうか。常識とは何であり、非常識とは何でしょうか。そしてその測る基準はどこにあるのでしょうか。もっとも弱い人と共にいる意味を今一度考えさせられました。

活動報告会のお知らせ

～札幌働く人の家～

働く若者たちのグループJOCは、カルデン神父と共にベルギーで最初のグループが始まって昨年で100周年を迎えました。

いま札幌JOCには2つのグループがありますが、夜な夜な札幌働く人の家に集まり活動を続けています。彼らの話をどうぞ聞きにいらしてください。

年に一度の活動報告会（総会）を左記の通り開催致します。

◆4月14日（日）14時30分～16時30分

①札幌働く人の家の活動と会計報告

②札幌JOCの活動と歩みの分かち合い

賛助会代表　上杉昌弘神父

JOC協力者　鳥居明子